



TITLE:

静脩 Vol. 36 No. 3 (2000.1) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 36 No. 3 (2000.1) [全文]. 静脩 2000, 36(3)

ISSUE DATE:

2000-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66032>

RIGHT:



静脩

2000年1月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 36, No. 3

京都大学附属図書館創立百周年記念式典に際して

京都大学総長 長尾 真

京都大学附属図書館創立百周年をお祝い致します。

京都大学附属図書館は明治32年の発足以来、今日に到るまでの間に着実な発展をとげて来ました。現在学内に60余の部局図書館・図書室をもち、合計で564万冊余の図書とぼう大な資料を有する大図書館となっております。これは東京大学図書館の754万冊、国立国会図書館の713万冊に次ぐ日本第3の大図書館であり、誇りとすべきことと存じます。その活動の規模は、中央館であるこの附属図書館だけで年間の入館者75万人、年間の貸出し冊数13万点であり、非常によく利用されている図書館であります。また近年は休日も開館し、学生・研究者はもとより市民の方々にも利用していただけますし、図書館間相互貸借制度にも積極的に協力し、年間600点余を他の図書館に貸出し、また年間2万件の文献複写サービスを行っております。これらの外部に対するサービスは年々増加しており、定員削減の中での限られた図書館員の負担は益々ふえているのでありますが、国内有数の図書館としての社会的使命を認識して、サービスに努めていただいている図書館員の皆様に対し心より感謝致します。

京都大学図書館は、その創立の時点における精神が非常にユニークでありました。すなわち、他の大学図書館においては学生を書庫に入れず、学生は教官の講義録をうつし、これを記憶



することに集中していたのに対し、京都大学においては教官は学生に課題を与え、学生を図書館書庫に自由に入れ、自分で書物や文献をすべて課題を解決させるという方法を中心とした教育をしたのであります。したがって京都大学図書館は学生の勉強において特に重要な位置を占めるものであります。

今日の大学教育の1つの問題は、学生が学問に対する積極的な興味をもたず、勉強にやる気をもたない者がかなりいるという現状にあります。これを解決するためには、学生に課題を与え問題意識をもたせ、ていねいな少人数教育を行う必要があると考えます。昨年からは始まりましたポケットゼミはその1つの試みであります。ここで教官全てが京都大学創立時の教育の精神を思い返し、図書館利用を重視した教育を行うことが必要でありましょう。そしてこのような教官の努力に呼応した図書館職員のあり方が求められていると思います。

この点からは、昨年度から始められた全学共通科目“情報探索入門”は大きな意味をもつものであると存じます。これは教官の講義と図書館員の指導する演習が内容的に1対1に対応して行われるもので、コンピュータを活用して図書館情報、データベース情報、インターネット情報などを検索する技術を教えるとともに、どのような情報や知識がどういったところにあると利用できるのかということを知ることのできるものであります。ここで特筆すべきは、演習に対して附属図書館をはじめとして多くの部局図書館の職員が積極的に参加してくれていることであります。同様の努力は附属図書館や部局図書館で半日コース程度でも行われておりますが、これらは、図書館と図書館職員の重要性を学内に広く認識してもらい、その地位を高めることに役立つとともに、図書館職員自身の研修にもなるものであり、高く評価されるべき活動であると存じます。今日においても我が京都大学図書館は開放的であります、これからの情報時代においては創立の時の図書館精神を忘れずにより一層の努力をし、その良い特徴をのばして行っていただきたいと存じます。

図書館の使命は、言うまでもなく人類の英知の結晶である書籍を代表とする情報・知識を体系的に収集し保存することであり、またこれを全ての人の自由な利用に供することです。国立国会図書館は納本制度によって国内で出版された書物は全て納本されることが原則となっていますが、その納本の金額の半額を出版社に還元しているためあって、予算の面から全ての出版物を集めることは出来ないというのが実状であります。イギリスでは納本制度が日本よりもしっかりしていて、英国図書館だけでなく、オクスフォード大学、ケンブリッジ大学、その他の大学図書館にも納本されることになっています。日本の有力図書館が700万冊程度の蔵書であるのに対し、米国議会図書館は2700万冊、ハーバード大学図書館は1400万冊、英国図書館1200万冊、フランス国立図書館1000万冊といった数字が示すように、世界の先進国における図書館は充実しており、彼我の差は歴然としております。日本はもっと図書館に予算を与え、体系的にしっかりした収書をしてもらう必要があるのであります。

京都大学においては全体として年間に約8万

冊の図書を購入していますが、ほとんどは教官の研究費からそれぞれの教官の研究目的にあった図書を購入しているのであり、図書館としての立場から購入すべきものがかなりしも購入されていないのであります。特に京都大学附属図書館において年間に自由に選書して購入できる書物は僅かに3000～4000冊であり、これは日本で1年間に出版される書物の10%以下の数字であります。これから国際的にも重要な地位を占めようとする大学としては全く不十分であるといわざるをえません。

研究者にとっては図書よりもさらに大切なのは雑誌であります。毎月発行される雑誌には最先端の研究成果が掲載されるからであります。京都大学図書館はこれまでの総計として約68,000種の雑誌類を持っていますが、現在毎年購入している雑誌類は国内発行誌15,000種、外国発行誌12,000種であります。しかし雑誌の購入費は年々高騰しており、限られた予算で購入できる雑誌の種類は減らしてゆかざるを得ないという困難に直面しています。これは国立国会図書館においても同様であり、我が国図書館システムの最後の砦である国立国会図書館が最近数千種の雑誌の購入をやめたのはまことに残念であり寒々とした気持ちにならざるをえません。しかしこういったことは単に日本だけのことでなく、世界中の図書館の直面している状況であり、複写サービスや電子図書館のネットワーク等による相互利用などの工夫によって切り抜けてゆかねばならないでしょう。

今日の図書館活動においては、紙を媒体とする図書資料類とともに電子媒体上の情報を無視することはできません。最近ではFD（フロッピーディスク）やCD（コンパクトディスク）などによる出版がふえて来ておりますが、これらを取り扱うしっかりしたシステムはまだ確立されていません。時代が進むにつれて種々の新しい形式の電子媒体が出て来ますし、またどんどんと小型になってゆき、名刺の大きさよりも小さいものも出て来ています。情報媒体が小さくなってゆくのは好ましいことではありますが、図書館での取り扱いはいかたうかになります。こういったことに対する対処がようやくこれから始まろうとしているところであります。

電子図書館の構築は文部省の努力によって、ここ2、3年来ようやく緒についたところであり、

京都大学附属図書館においても特徴のある電子図書館を建設しつつあることは大変よろこばしいことであります。この電子図書館はインターネットを通じて広く一般社会に公開されていますので、最近1ヶ月間に60～80万件のアクセスが国内外から来ており、今後ますます増加するものと推定されています。学内向けにはオン



ラインで雑誌記事索引や外国雑誌目次データベースサービス、さらに35誌ではありますが外国雑誌が電子ジャーナルでサービスされるなど、種々の情報が電子的に便利に利用されています。電子図書館は今後ますます重要性を増してゆくものと考えられますが、国の財政難から数カ所の国立大学に設置されている現状以上には当面増設されないという状況でありますから、これらの電子図書館は開かれたものとしてより一層の内容の充実と出来るだけ広い範囲へのサービスを心がけねばなりません。

インターネット上の情報をどう取り扱うかということは、これからの図書館にとって重要な深刻な問題であります。インターネット上には文書情報だけでなく、数値情報や表形式の情報などのいわゆるデータベース情報、図や写真、映像情報、演説などの音声情報や音楽などもあり、これらが総合的に取り扱われたマルチメディア情報表現をなしております。こういった情報はばう大でどのような目的にも利用できる可能性をもっているわけですが、一方ではあまりにもばう大すぎ、また多様であるために、利用者が明確な目的を持ち、しっかりした検索の手段をもたないかぎり、人々を混乱に落とし入れ

たり、また絶望を感じさせることにもなるでしょう。

一方、情報を探索するときには意外性に注目し、これを楽しむという余裕のある態度が大切であります。こんな情報があったのかという予想しなかった事柄を評価し、取り上げることができねばその人の世界は広がりません。したがって自分の設計にしたがった情報の取得のみならず、いわば遊び心をもって情報に接し自分の世界を広げてゆくという形で、調和のとれた検索、図書館利用をする事を心がけることが大切でしょう。そういった態度でインターネット情報の活用にも習熟してゆくことは、一般利用者だけでなく図書館職員にとっても大切なことであります。

インターネット上の情報は多くは紙には印刷されず、また常に更新されていますので、永久保存という観点から問題は深刻であります。人類の知的財産を永久保存するという立場からは意味のある情報を選別し、著作権者の承認をえて保存するということが必要ですが、これは現在全く見通しがえられておりません。また電子的な記憶装置といえども有限であり、日に日に創造される情報を全て保存することはほとんど不可能となりつつあります。この問題をどうすればよいかは、国立国会図書館を中心として、我々大学図書館も加わって検討し、将来の方向性を出してゆくべき事柄であると存じます。

さて次の百年にむけて、京都大学図書館は何を考えねばならないかという課題は重要であります。多くの方がそれぞれに考え、これを持ちよって検討して、長期的な目標をかかげる必要があるでしょう。不十分ですが思いつくままにならべてみますと、次のように多くの課題が存在します。

- 1) 図書館スペースの拡張：閲覧室の拡張とともに、書庫スペースの拡大が急がれる。
- 2) 学習図書館と研究図書館への整備：総合人間学部の図書館のスペースを少なくとも4～5倍に拡大し、主として学部学生のための学習図書館とすることが望まれる。また60余りある部局図書館を数個の分野図書館に統合し、これからの学際的研究にも対応できるようにする必要があるだろう。
- 3) 24時間開館：米国の主要な大学の図書館で24時間開館しているものが幾つもある。京

都大学でも学生・研究者にとって図書館がいつでも利用できる頼りがいのある場所となる必要があるであろう。

- 4) 図書館経費の抜本的増額：ハーバード大学などに負けない図書館とするためには現在の大学全体の図書資料購入費を数倍に拡大し、附属図書館が体系的に購入するシステムが必要となるだろう。またそれに対応して図書館員の増員が必要となる。
- 5) 電子図書館の充実：図書館の所蔵している図書資料を順次電子化してゆくとともに、大学内で創造される研究者の論文や資料・データ、その他の大学情報をできるだけインターネットに接続された電子図書館に入れ保存・活用することが必要である。また図書館が研究者の依頼をうけて電子情報取得の代行業務をすることも検討すべきかもしれない。
- 6) 総合情報センターへの脱皮：図書館が広くあらゆる情報を収集・保存し利用に供するセンターであり、教育研究に深くかかわってゆくものであるとすれば、総合情報メディアセンターや大型計算機センターとどのように連携協力し、また場合によってはどのような形で統合した組織となつてゆくのが良いかを、研究者、学生の立場にたつて検討することが必要だろう。

7) 学生、研究者に対する図書館員の積極的なかわり：図書館の自動化、電子図書館化が進むにしたがつて、図書館職員の仕事の重点は参考業務や情報探索への支援や教育の方向に移ってゆくだろう。学問分野に対応した専門性の高い司書の養成、さらにそういった職員と教官との密接なネットワークを作つてゆく必要があるだろう。人類の知的財産の多くは研究者の頭脳の中に存在しているからである。

8) 世界の図書館との連携：コンピュータネットワークが発達すると、当然世界中の図書館が連携するような時代がくるだろう。その第1ステップとして、たとえばカリフォルニア大学連合の図書館と協定を結び、相互利用を活発化するといった努力が必要になると考えられる。

これらの課題は一朝一夕に実現できるものではありませんが、目標をはっきりと持ち不断の努力をしてゆけば、いつかは実現できるものと考えます。

京都大学附属図書館の百年をふりかえり、これを将来へむかつてのエネルギーとしていただきたく、少し乱暴な事を申し述べました。これからの附属図書館の発展を念じまして、お祝いの言葉といたします。

(ながお まこと)

式 辞

京都大学附属図書館長 菊 池 光 造

本日は皆様ご多忙のところ、文部省からは学術国際局、太田慎一学術情報課長のご臨席をいただき、また国立大学図書館協議会会長であります東京大学落合卓四郎図書館長をはじめ諸大学の図書館長、本学からは、長尾総長をはじめ両副学長、諸部局長の先生方、さらには多くの関係者のご出席を得まして、ここに京都大学図書館創立百周年記念の式典を開くことができますことは、私どもの大きな喜びでございます。ここに厚く御礼を申し上げます。この機会に、

附属図書館を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

京都大学の図書館事務は明治30年の本学創立とともに理工科大学教室の一部に仮図書館

室が設けられたことに始まるわけです。この年6月18日、勅令第209号によって本学が創立され



ると同時に、東京および京都の両帝国大学の官制も定められ、大学図書館および図書館長の名称もはじめて明記されました。しかし、京都大学図書館と致しましては閲覧業務が開始された明治32（1899）年12月11日をもって創立の日としています。

いま創設期の附属図書館を振り返って注目されますことは、京都大学初代総長木下広次（ひろじ）の事跡であります。彼は東京帝国大学の教授時代に「図書管理」（現在の図書館長）を兼務して、図書館について深い理解を持っておりました。まず木下総長は、新設の京都大学図書館のために、全国の識者、諸機関に、総長名で図書・資料・標本などの寄贈を訴え、これに応えた有志のお力によって短期間に実に膨大な量の貴重な図書・資料が収集されたのであります。ちなみに申しますと、かの漱石夏目金之助も、この依頼にこたえて出版社に寄贈協力方を申し送ったことが漱石日記の中に記されております。

一方、木下総長は、附属図書館創立の当初から、本学関係者だけではなく、広く一般市民にも閲覧の便宜を与えることを考えていました。いわば、すでに現時点に通ずる「開かれた図書館」の構想を持っていたのであります。また、きわめて先駆的に、学生の書庫内検索をも許す体制をとりました。

京都大学附属図書館が今日あるのは、百年前、その出発の時点で木下総長がとられた図書館行政の賜物であるといえます。

いま、その後の図書館の歩みを振り返りますと、多くの注目すべき動きがありました。

一例をあげれば、吉田松陰の遺言にしたがって造られた「尊攘堂」の「維新特別資料文庫」が明治33年に「尊攘堂保存会」から京都大学図書館に寄贈され、明治36年には学内で竣工した尊攘堂で、この文庫の一般展示会が開かれました。これが、その後今日まで続く本図書館の公開展示会の濫觴であります。ちなみに申しますと、尊攘堂は今もこの図書館の西北隅にひっそりと立って時代の変遷と京都大学の行方を見守っているかのようであります。

言語学者新村 出教授は、明治44年から昭和

11年まで、明治・大正・昭和の3代、実に25年の長きにわたって附属図書館長を務めました。彼の洋の東西に亙る文献についての広い見識により、本館の誇るべき特殊文庫の大半がこの時期に収集されました。いまこれらを列挙する暇はありませんが、歴史と日本文化の凝縮した京都の地を背景として、その後も現在にいたるまで営々として続けられてきた文献資料収集の成果は、本図書館を日本文化・古典研究のメッカにしたのであります。

図書館には本来研究図書館と学習図書館という二つの面があり、研究図書館機能は、しだいに部局図書館・室に移行してきたわけですが、多くの貴重書・資料や大型コレクションを所蔵する附属図書館は学部学生諸君のための学習図書館であると同時に、人文系の研究図書館としての機能も持ちつつ発展してまいりました。また現在本図書館は理工学系の外国雑誌センターとしても機能しているのであります。

学習図書館的機能をめぐっては、すでに昭和4年から教官の講義に連動する「指定図書制度」が実施されたこと、昭和8年からは法経第4教室の2階に第2閲覧室を開設して、自学自習の構想の一端を実現したことなどが注目されます。

本日は図書館の元職員の方々に多数ご出席いただいておりますが、戦時中の暗い谷間の時期、戦後の混乱期にも、京都大学附属図書館は歴代館長、その時々を担った職員たちの献身的な努力に支えられて、その機能を果たしてきました。この機会に私どもは、こうした先人たちのご努力にも感謝の念を捧げたいと思います。

ここで附属図書館の現状について申しますと、京都大学全体の図書館システムは60余に及ぶ部局図書館・室の総体であり、全体では蔵書数564万冊に及んでいます。中央館としての附属図書館は、開架10万7千冊、蔵書約80万冊を数えます。また国宝「今昔物語 鈴鹿本」をはじめ、重要文化財級の貴重書、貴重なコレクション群があり、その殆どを、いまや電子図書館として画像公開しています。閲覧席は1100席を配していますが、利用者はこれを遥かに超えて年間75万人、開館日1日平均2500人で、試験期には約5000人を数えます。

百年前の創設当時は、館長以下11人で出発した組織は、現在館長、事務部長のもとに総務課、情報管理課、情報サービス課の3課10掛を配する体制で、専任職員33人、非常勤職員23人の力で業務運営を支えているわけです。

さて、本学図書館は、昭和60年の本格的電算化開始以来、2度のリプレースを経て、図書館の電子化を推進してきました。学術情報センターのNACSIS-CATと密接な連携を持つ全学的な目録業務システムの基盤を整備し、インターネット時代に対応する図書館業務システムを目指して、平成9年度のリプレースでは京都大学図書館がNACSIS-CAT 2の接続第1号館となり、これを全面的に利用するトータルな図書館システムを全国に先駆けて導入することにもなりました。また、学術情報の多様化に対応して図書館のマルチメディア化を図ってまいりました。

こうした活動の延長線上に、現総長長尾先生が図書館長を務められた時代に礎石を築いた京都大学電子図書館が開花したのであります。

昨平成10年3月に正式にオープンした電子図書館は、オンライン・パブリックアクセスカタログ＝OPACによる高度な図書館・資料検索機能を提供すると同時に、CD-ROMによるデータベース、オンラインデータベースや電子ジャーナルの学内配信、そして何よりも発信型図書館の内容として、先に触れた国宝・重要文化財級の資料や、明治維新資料データベース、さらには京都大学百年史や京都大学博士学位論文論題一覧など多くのコンテンツをインターネット上で公開しています。入力データは先日100万件を超え、画像データベースの詳細画像も今年度中に14万枚に達する予定であり、幸い各方面から高い評価をいただいております。学外サイトからのアクセスは急増して、1ヶ月2万5000サイト80万ページに及び、海外からのアクセスも着実に増加しつつあります。

建物について触れますと、現在の建物は、昭和58（1983）年に竣工した第3代目のものでありまして、鉄筋コンクリート地上4階地下2階3層、総面積14011.25平方メートルで、そのうち地下の4706平方メートルが書庫面積となっております。しかし学習図書館として学生諸君に提

供する閲覧席の増設は焦眉の急であり、書庫の収容能力も遠からず限界に達することが予測されます。いまわれわれは、新しい世紀の要請にこたえるべく建物の問題にも取り組むべき地点にきているといわねばなりません。

ところで、附属図書館はいま、この創立百周年を機会に、図書館の現状と課題を見定めるべく自己点検・評価に取り組み、これを踏まえて専門家による外部評価を実施していただくという作業を進めています。

確かに、まさに世紀の変わり目に百周年を迎えた京都大学図書館は、厳しさを増す環境と挑戦すべき多くの課題に直面しているといわねばなりません。

うち続く行・財政改革のもと、きわめて限られた財源の中で、いかに従来型図書館と電子図書館とのバランスをとりつつ図書館機能を充実させてゆくか。この延長上には、国立大学の独立行政法人化に対して図書館が如何に対応すべきかという課題も浮上してくるやに思われます。

大学改革との関連では、一方でカリキュラム改革と連動しつつ、自主的な学習を期待される学生諸君に、どのようにして充実したサービスが行えるのか、また一方では大学院重点化によって増大する大学院生、社会人や留学生に、いかにしてより高度なレファレンス・サービスが行えるかが問われています。さらに、膨大な書誌情報の「遡及入力」、学内および大学間の図書・資料相互利用と迅速なデリバリー、図書・資料の収集と保存図書館機能の追及、情報倫理の確立と著作権問題への対応、国際交流の推進など、直面する課題は枚挙にいとまないものであります。

いま、京都大学図書館は、全職員が自己啓発と能力開発に努めて、こうした課題に挑戦し、図書館機能の更なる活性化のために努力せねばなりません。なにとぞ各位におかれまして、今後とも京都大学附属図書館を温かく見守り、ご支援、ご鞭撻をいただきますようお願いいたします。私の式辞とさせていただきます。

（きくち こうぞう）

祝 辞

文部省学術国際局学術情報課長 太 田 慎 一

京都大学附属図書館創立百周年に際しまして、心よりお祝い申し上げます。

あらためて申し上げるまでもなく、大学は知的資産を生産・蓄積し、かつ更新している場です。生産・更新については、研究者の方々が日々携わっておられるところですが、蓄積している場が図書館ということができるでしょう。

フローとストックという経済学の言葉でいえば日々の研究がフローであり、研究成果がストックということになると思います。



このような場で、はなはだ幼稚なことを申し上げますと、私が子供の頃の疑問は、なぜ日照が最も強い夏至が6月にあるのに8月に気温が最も高くなり、冬至が12月にあるのに2月に気温が低くなるのかということでした。その後、微積分を勉強しますと、日照は気温の上がり具合すなわち微分なり差分を与えるものであるのです、日照がコサインカーブとすると、気温はその積分であるサインカーブ、すなわち約4分の1年の遅れをもって気温の上昇カーブが描かれることが理解できたわけでありました。

ここで申し上げたいことは、例えば植物が成長するためには、日々の糧である日照も大事ではありますが、もう一つ重要な環境因子である気温も重要であることです。フローとストックはお互いに関連するものですが、これら両者が重要なのでありまして、日頃財政当局と我々が

折衝している場面でも、フローについては比較的良好に理解されるのですが、ストックの重要性はなかなか理解してもらえないことを痛感しております。

先ほどの長尾総長の、我が国の大学図書館に対する投資がはなはだお寒い状況であるというご指摘は、残念ながら当を得ており、大学図書館行政を担当している私としてははなはだ耳の痛い話ですが、文部省としてはその重要性を認識しつつ、今後も重ねて努力して参りたいと思います。

幼い話をもう少し続けさせていただきますと、中学校の時に習った論語の言葉に「温故知新」とか、「学ばざるはあやうし」という言葉がありました。学ばざるはあやうし、最近よく初中教育で指摘される詰め込み主義で、知識だけは増えてもそれが真の生きる力に結びついていない、あるいは応用力がない状態を示しているのではありませんか。逆に学ばざるはあやうしというのは、高等教育あるいは研究場面での現状を示しているのかも知れません。すなわち、新しいものを生み出すためには大いに「思う」必要があるわけですが、それが強調されるあまり、図書館にきて学ぶことがややおろそかになっているのではないのでしょうか。学ぶことも思うことも双方必要なことであり、これらはあくまでバランス上のことだと思います。

さて、図書館については、近年電子図書館の話題がさかんであります。図書館の世界の外でも情報のデジタル化が急速に進行しておりまして、ネットワークを通じてテキストデータのみならず大量の音声や画像データが流通しています。

これにつきましても、予算配分のバランスを考えると、端末やネットワーク周辺機器等、ハードウェアの整備は進んでまいりましたが、それに比べてコンテンツやソフトウェア関係の予

算が延びにくい状況を痛感しております。どうしても、財政当局を含めて我々は素人ですから、いわゆるハコモノとかパソコンとか、形のあるものは整備状況が目に見えるものですから理解し易いのですが、ソフト面は目に見えにくいいため、ともすれば軽視され易い傾向があります。この場でこのようなことを申し上げても言い訳にしか聞こえないとも思いますが、ソフトの重要性についても是非いろいろな場面で皆様方が声を大きくして強調されることを、この機会をお借りしてお願いしたいと思います。

京大図書館は百周年を迎えました。これからの百年を考えますと、独立行政法人化の話もありますし、全く予断をゆるしません。電子図書館がどうなるかについても、現在は電子化の方向性が見えているだけで、すなわち我が近傍の微分係数ベクトルのような方向性が見えている

だけで、大局的な解がどこに行き着くかわかりません。正直10年先の姿を予想することが非常に困難になっています。

これからは大競争時代に突入すると言われています。ここに外国のかたもご列席ですが、私は日本国の公務員でありますので、国際的に友好的な競争関係を保ちながら我が国の学術の基盤整備に今後も取り組んで参りたいと存じます。

最後になりましたが、図書館長、また前図書館長であられます総長をはじめ、京都大学図書館の関係の方々のご尽力にご期待申し上げ、京都大学図書館のますますのご発展をお祈りして簡単ではありますがお祝いの言葉とさせていただきます。

(おおた しんいち)

祝 辞

国立大学図書館協議会会長
東京大学附属図書館長

落 合 卓四郎

京都大学附属図書館の創立百周年記念式典に際し、国立大学図書館協議会を代表いたしまして、ひとことお祝いの言葉を申しのべさせていただきます。

まず、京都大学附属図書館の創立百周年、誠におめでとうございます。京都帝国大学が1897年に創設され、その2年後の1899年12月に附属図書館が開館し、その開館をもって附属図書館の創立とされたと同ったところでございます。その後の百年の歩みは、まさに20世紀の歩みと共にと申すことができるかと思っています。

千年以上の永きにわたり我が国の都であり文化、学問の中心であったこの地で、帝国大学がつくられ、初代木下広次総長が率先し、公家、町衆の支援のもとに、多くの貴重な図書、資料をお集めになったのを初めとして、この百年の間に多くの京都の人々の協力と尽力のもとに、



文化的に、学問的に、わが国がもっとも誇れる大学図書館の地位を不動のものにしたのであります。その蔵書のなかに、多くの天災、戦乱などの消滅の危機を乗り越えてきた貴重な資料の数々があることを知るとき、大学図書館に関係するものとして、私は特別な尊敬の気持ちを持つものです。

京都大学の歴史を振り返るとき、教育・研究のそれぞれの分野で巨人を生み出してきました

た。私がいささか知り得る理学の分野でも、湯川先生、朝永先生、福井先生、利根川先生のノーベル賞受賞者、また広中先生、森先生のフィールズ賞受賞者を初め枚挙にいとまがありません。また社会の各界、各分野に幾多の異能、異才、有為な人材を輩出してきたことは衆目の一致するところです。東京から離れた所、自由を尊ぶ雰囲気の中で、研究者も学生も思索、勉学にいそしんだことは想像にかたくありません。そこで附属図書館とその蔵書が果たした役割は決して少なくなかったと思います。

すでに、菊池館長、長尾総長、太田文部省学術情報課長からのお話がありましたように、これまでの歴史は、大学図書館界で指導的な役割を担ってきたことを余すところ無く示しています。私ども図書館関係者が着目する基礎データであります蔵書数、利用者数、相互協力・データベースのサービス、電子図書館化、情報リテラシーのいずれにおいてもその実績ならびに活動成果はどなたがご覧になっても素晴らしいと思われることでしょう。あらためてその成果に敬服しているところです。

このことは、菊池館長先生をはじめ図書館職員の皆様方の並々ならぬご尽力、ご支援なさっている長尾総長はじめ教官の皆様、事務局や部局の職員の皆様のご努力の賜物と、心から敬意を表するものです。もって大学図書館の模範となるべきものだと思っております。

ところで、国立大学図書館協議会は、昭和43年6月に創設されました。今年で31年になります。それ以前は昭和29年から開催された全国国立大学図書館長会議という国立大学の図書館長の集まりだったようです。その前は勉強不足で分かりません。現在、国立大学99大学と放送大学の合計100大学を会員館として構成されており、通常は国大図協と呼ばれます。

大学の使命である教育・研究を支援する組織として各大学の図書館活動が的確に機能するために、調査・研究を共同して行ったり、圖書の相互貸借など実質的な相互協力の推進を図っています。京都大学は創設以来副会長館として重要な役割を担って頂いており、日ごろより感謝しているところです。

いま国大図協はその存在意義を賭けまして大きな問題に取り組まねばなりません。すなわちインターネットなどの情報技術の飛躍的な発展は、図書館に大きな革命を引き起こしつつあります。20世紀の書物図書館が発展して、21世紀は電子図書館の時代になります。その課程で各大学図書館の資料は世界的な規模で公開・共有されることになることが求められます。一方増え続ける資料を共同で保存することが求められます。デジタル資料はwwwで共有できますし、インターネットを通して、圖書の相互貸借、相互複写が簡単なプロセスで可能になります。そのために国大図協は各会員館の図書業務の言わば標準プロトコールに合意する困難な仕事に取り組まねばなりません。このプロトコールは、国立大学が現在求められています10年間で25パーセントの定員削減と30パーセントのランニングコストの削減を前提として機能することが絶対必要です。この一環として国大図協は、まだデータベース化されていない図書目録情報の遡及入力 of 早期の完成と、全国的な視野に立った全国共同利用のための保存図書館の実現に互いに協力することを決議しました。図書館の電子化に一步先んじている京都大学附属図書館のリーダーシップに期待すること大であります。

国大図協として取り組まないといけないもう一つの問題は、少子化による大学の学習環境の変化に図書館をどう備えるかです。現在大学進学率は18歳人口の48パーセントであり、2010年ごろには90パーセントになってもおかしくないと言われる事態を想定して、大学図書館は相当に性根をいれて学習図書館の機能の強化を図らねばなりません。必然的に学習目的が多様化し、かつ能力も均質でない学生達に自学自習をしむける良い環境が必要であります。その基本は、過去も、現在も、未来も彼らが、じっくり思索にふけることが本質的に大事です。そのために、情報アクセス手段は多様になりますが、先人の思索の成果としての図書は不可欠です。各大学図書館は、学生が万巻の古典籍に加え、自由に読める新しい圖書の増強を目指して様々な努力を試みているところですが、京都大学附属図書

館がそのモデルとなってほしいと願っているところだ。

京都大学が益々素晴らしい成果を挙げられ、
京都大学附属図書館がそこで大きな役割を果た

されんことを願って、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は大変おめでとうございます。

(おちあい たくしろう)

京都大学附属図書館創立百周年記念式典

11月29日(月)、京都大学附属図書館創立百周年記念式典が、総長、部局長はじめ学内外の関係者200名の出席を得て、附属図書館3階AVホール(第1会場)と同4階大会議室(第2会場)において行われた。

この式典は午前11時に始まり、菊池光造附属図書館長の式辞に続いて、長尾真総長の挨拶、太田慎一文部省学術国際局学術情報課長、落合卓四郎国立大学図書館協議会会長(東京大学附属図書館長)の祝辞、工藤智規文部省学術国際

局長ほかの祝電披露が行われ、正午に終了した。

引き続き、午後12時10分から附属図書館4階調査室、同大会議室前ロビーにおいてレセプションが催された。

なお、午後1時30分からAVホール、大会議室に満席の聴衆を得て、百周年記念展示会講演会「弁慶像の展開：御伽草子『弁慶物語』 平家物語から室町物語へ」が池田敬子京都府立大学教授を迎えて行われた。



レセプション

池田敬子京都府立大学教授を迎えて



新企画：地域・子供文庫も展示参加へ

附属図書館創立百周年記念公開展示会

お伽草子 - 物語の玉手箱 -

例年行われている秋季公開展示会が、創立百周年記念事業のひとつとして、11月24日から12月7日まで開催され2,000人(子供100人)の見学者があった。

今年のテーマは、“お伽草子 - 物語の玉手箱 - ”で、文学部大学院生の協力を得て、学内における“お伽草子”の所蔵調査から始まり、附属図書館、文学部、総合人間学部で144点96種を確認。この中から美しい奈良絵本を中心に90点を、関係部局の協力を得て一挙に公開することができた。その中の数点については、全挿し絵をパネル化・展示するとともに、巻物“たま藻のまへ”については、電子展示により全体をスクロールして見る試みをし、インターネット“電子図書館”でも公開している。

また、展示会始まって以来の企画と思われるが、一般公開、大学の地域公開などを考慮し、“おとぎばなし”として年齢層にかかわらず広く知られている作品も多く、小・中学生等子供たちにも公開することとし、地域・子供文庫等への協力依頼を行った。協力内容は、“浦島太郎”の挿し絵に子供たちが現代感覚で着彩する企画に、13文庫151名(1歳8ヶ月～中学3年生まで)が参加、250点の出展があった。これに、職員、学生による挿し絵の水彩・パソコン等による着彩60点もあり、展示会に華を添えた形となった。このほか、土・日限定であらかじめ準備した数点の画像にパソコンによる塗り絵(着彩)体験も行った。

来場者へは、希望により展示図録の配布を行い、子供たちへは、お伽

草子の挿し絵の中から数点を選び、手作りによる“ぬりえ集”を配布したが、お年寄りや教育関係者などからの強い要望もあり当初予定の5倍を作成・配布した。また、会期中は“お伽草子展ニュース”1～6号を発行し、みどころ・解説などを紹介、その他有志による生け花の提供など多彩な催しとなった。



来館状況は、社会人(主婦含む)が6割、中学生以下が1割。住所別では、地元京都が6割、近畿地区を除き、北は北海道、南は熊本まで22都道府県から140名の来館があった。

今回の展示会は、地域との連携・協力・公開と、子供たちをも参加といういまままでにない企画を取り入れたことや、予算の制約もあって、展示会WG・関係者の労苦は大変なものであった。アンケートに見られる全体の感想としては、普段見ることができない、また、きれいな資料が閲覧できてよかった、今後も公開を続けてほしい、各企画がよかったなど大変な好評を得ている。



附属図書館百年

「『静脩』総目次」を読む

附属図書館情報サービス課雑誌・特殊資料掛長 松田 博

『総目次』の「資料紹介」に関わってもう一点ふれておきたい。京都大学が所蔵する特殊文庫で、規模も大きくしかも内容的にもその豊かさが重要視されながら、逆に『静脩』で紹介されなかったものがある。『全国国立大学所蔵貴重図書目録』（1973年）当時の特殊文庫でみてもその数はかなりになるが、それらのうち1万冊を超える文庫で紹介・解説のないものに「桑原隲蔵文庫」、「マイヤー文庫」、「松本文三郎文庫」の三つがある。とりわけ、上野文庫やビューハー文庫とならび、経済学部の三大コレクションの一つでもある「マイヤー文庫」が、『静脩』で紹介されてこなかったことは、受入当時の歓迎ぶりからみても、コレクションの内容からみてもたいへん残念で不幸なことであったと思われる。そこで、少し古いものではあるが1985年当時、別の機会に書いた原稿が手許に残っているので、それをなぞりながら「マイヤー文庫」についてふれておきたい。

「マイヤー文庫」は、統計学会の権威でミュンヘン大学教授であったゲオルグ・フォン・マイヤーの旧蔵になるコレクションで、官房学関係、統計学関係・各国・各種統計書を主とする内容の、総数1万5千余冊の文庫である。氏の没後、文庫が市場に売りに出されたのを知った京大経済学部が、大蔵省を動かして、ドイツから受け取る賠償金から1万6千マルク（邦貨にして当時の約1万4千円）を割り、1929年に購入したものである。当時、学界では東大の「エンゲル文庫」が1923年の関東大震災で焼失してしまった（ただし、焼失を免れた1126冊が復活されている。「『Classified Catalogue of Engel's Library』1984年」）こともあり、この「マイヤー文庫」の京大への招来に対し大きな期待を寄せていた。

マイヤーは、1841年2月12日、ビュルツブル

クで数学を専攻する大学教授を父として生まれた。同地のギムナジウムに入り勉学に勤しんだ後、給費生としてミュンヘン大学に学んだ。ミュンヘン大学では法律学および国家学を学び、1865年には国家試験に合格し、翌1866年母校経済学部の私講師になるとともに、同時にバイエルン官房統計課に入った。1868年には助教授に昇るとともに、統計課では翌年ヘルマン教授の死によって課長を引き継ぎ、組織替えとともに局長に任じられた。1878年、帝国煙草専売調査委員として米国を調査し、その報告がビスマルクの注目するところとなり、帝国の官房に移ることとなった。アルザス・ロートリンゲン省の副秘書官として財政ならびに御料地に関する局長に任ぜられたことからシュトラスブルクに移り、1887年までの7年間をこの地で活躍した。1887年官界を去り再び学界にもどった。1890年シュトラスブルグ大学の私講師として招かれ、5年後の1895年に名誉教授となった。更に3年後の1898年、母校ミュンヘン大学に正教授として迎えられ、1920年まで勤めあげた。その間1913年から1914年まで同大学の総長を務めた。1920年の後も大学に通い研究を続けたが、1925年85才で他界した。

このような経歴を持つマイヤーの蔵書は、特に統計局長の任をおったことから、各国・各種統計書がその主流をなしており、“Preussische Statistik. Berlin, 1891-1925.” “Schweizerische Handelsstatistik. Bern, 1860-1919.” “Statistique du Royaume de Serbie. Belgrad, 1902-1907.” “Statistisches Jahrbuch für Deutsche Reich. Berlin, 1880-1937.” “Statistische Jahrbuch für Elsass-Lothringen. Strassburg, 1910-1914.” 等をはじめとして6千冊をこえる蒐集がなされている。コレクションの中心でもあるこれら統計書関係については、従って、今後の紹介が予想さ

れるのでそれにゆだねるとして、ここではむしろ、コレクション中の自然科学関係のものが一定数をしめることに戸惑いというか、少し違和感を覚えるので、それら原典のいくばくかを紹介しつつ、このあたりの事情についてふれておきたい。

Berchorius, Petrus: Liber Bibliae moralis. Ulm, J.Zainer, 1474. ベルコリウス『道德論』はインクynaブラの1点であり、ドイツの都市UlmでJ. Zainerが印刷、出版したものである。黒一色刷り、ダブルコラムスの体裁で、装訂は羊皮の41cmの大型本である。Descartes, René: Discours de la méthode pour bien conduire sa raison, & chercher la verité dans les sciences. Plus, la dioptrique, les météores, et la géométrie, qui sont des essais de cette méthode. Leyde: I.Maire, 1637. デカルト『方法序説』は、原文31語の長文のタイトルであるが、方法を語る部分のみ独立させ、はじめの4語でもってそう呼ばれている。印刷、出版は、J. Maireで、オランダのライデンで出版された。デカルト41才の時の刊行である。フランス語で書かれ、「序説」本文及び「屈折光学」、「気象学」、「幾何学」の三試論からなっている。今日、この本が何部存在するかは定かでないが、稀覯なものであることには間違いない。京大経済学部以外には慶応大学、金沢工業大学にその所蔵を確認することができる。Newton, Isaac: Philosophiae naturalis principia mathematica. Londini, J.Streater, 1687. ニュートン『自然哲学の数学的原理』、通称「プリンキピア」と呼ばれるこの書は、科学史上最も偉大な著作で、これに匹敵するのはダーウィンの『種の起源』のみであろうとも云われている。ニュートン45才の時の刊行であるが、ラテン語で書かれ、内容は「力学理論」、「流体力学」、「天文学」に分かれている。初版には2種類があり、「『プリンキピア』の自然哲学」(1)、「ニュートン『プリンキピア』初版(1687)」(2)等によれば、出版部数は国内向け(A)が250-400部、販売者名のはいった国外向け(B)が50部刊行されている。定価は(A)が9シリングで、(B)はそれより高い値段がつけられた。1963年当時

で(A)が143点、(B)が46点の総計189点の現存が確認されているという。ちなみに、国内の所蔵機関についてみれば、(A)は国立国会図書館、慶応大学、金沢工業大学に、(B)は京都大学、東京大学、近畿大学にその所蔵を確認することができる。第2版が刊行されたのは1713年のことである。Newton, I.: Optice. 1706. 同『光学』は「プリンキピア」と並ぶニュートンの二大主著であるが、ニュートンの理論に対するフックやホイヘンスの反論、論争の中で、原稿がほぼ完成した1694年の10年後、1704年2月に英語版で出版された。「マイヤー文庫」所蔵のラテン語版からは著者名が入っている。Gauss, Karl Friedrich: Disquisitiones arithmeticae. Lipsiae, G.Fleischer, 1801. ガウス『整数論研究』は、近代整数論の基礎を構築した著作として高い評価がなされている。ガウス24才の時の刊行である。Gauss, K.F.: Theoria motvs corporvm coelestivm in sectionibvs conicis solem ambientivm. Hambvrgi, F.Perthes, 1809. 同『天体運行論』は、ガウスが天文学や地磁学の研究に没頭した時期に完成をみた大著のひとつである。以上であるが、これら以外に、ユークリッド(Euclides)“Elementorvm. 1574.”やオイラー(Euler, L.)“Introductio in analysin infinitorum. 1748.”、ラグランジェ(Lagrange, J.L.)“Théorie des fonctions analytiques. 1797.”、ラプラス(Laplace, P.S.)“Mechanik des Himmels, 1800-1801.”、リービヒ(Liebig, J.v.)“Einleitung in der Naturgesetz des Feldbaues. 1862.”、リンネ(Linné, C.)“Philosophia botanica. 1780.”、メール及びボスコヴィッチ(Maire, C. et Boscovich, R.J.)“Voyage astronomique et géographique. 1770.”等もみられる。こうした自然科学関係分野の組織的、目的意識的な文献渉猟はマイヤー本人とは思えず、従って、父アロイス・マイヤーによって蒐集・構成されたということができる。というよりむしろ、これらの蒐集は数学・天文学を専攻していたアロイス・マイヤーにしてみれば当然のことであったというべきであろう。

次に経済学関係文献について紹介しておきたい。パベジ『機械及び製品の経済について』

初版 1832 年、ブレンターノ『農業政策』初版 1897 年、ビューヒャー『労働とリズム』初版 1896 年、ハスパッハ『アダム・スミス研究』初版 1891 年、ジュースミルヒ『神の秩序』1762-1776 年、マルサス『人口論』6版 1826 年、メンガー『ドイツ国民経済学における歴史主義の誤謬』初版 1884 年、ミル『政治経済学綱要』仏語版 1821 年、ミラボー『人間の友』1758 年、ニース『独立の学問としての統計学』初版 1850 年、リカード『経済学及び課税の原理』仏語版 1821 年、サヴァリ『完全な商人』1726 年、シュモラー『一般国民経済学原理』初版 1900-1904 年、シスモンディ『商業的富について』初版 1803 年、スミス『国富論』独語版 1810 年、スチュアート『経済学原理』1796 年、スタイン『フランス社会運動史』初版 1850 年、チューネン『孤立国』1850 年、トレンズ『穀物貿易論』3版 1826 年、同『富の生産に関する一論』初版 1821 年、ヤング『政治算術』1777 年をはじめ基本的な文献が幅広く集められている。“Colbert, J.B.: La vie de Jean-Baptiste Colbert. 1695.” “Mirabeau, V.R.: Théorie de l'impôt. 1761.” “Steuart, J.: Abhandlung von den Grundsätzen der ... 1761.” “Pfeiffer, J.F.v.: Lehrbegriff sämtlicher economischer Cameralwissenschaften. 1764-1779.” “Necker, J.: De l'administration des finance de la ... 1784.” “Thompson, B.: Essays, political, economical and philosophical. 1798.” “Borowski, G.H.: Abriss des praktischen Cameral- und Finanz-Wesens. 1799.” “Young, A.: Le cultivateur anglois ... 1800-1801.” “Bentham, J.: Tactik oder Theorie des Geschäftsganges ... 1817.” “Nebenius, K.F.: Der öffentliche Credit. 1820.” “Saint-Simon, H.: Du système indutriel. 1821.” “Ganihl, C.: La thèorie l'èconomie politique. 1822.” 等、年代を追うとかなりのものが揃っている。

法学、哲学等の分野でも、グロティウス (Grotius, H.) “De jure belli ac pacis. 1680.”、モール (Mohl, R.) “Der Polizei-Wissenschaft nach den Grundsätzen des Rechtsstaats. 1866.”、ベール (Bayle, P.) “Dictionnaire historique et critique. 1741.”、リヴィウス (Livius, T.) “Römische Historien, jetzundt ... 1538.”、カント (Kant, I.) “Critik der Urtheilskraft. 1790.” 等がある。特に、最後のものは19世紀を通して西洋哲学思想を支配したカント思想の中で異彩を放つ、『純粹理性批判』1781 年、『実践理性批判』1788 年、『判断力批判』1790 年のいわゆる三批判書の最後にあたる。紙幅の関係でこれ以上の紹介ができないが、今日では入手困難な文献が数多く網羅されている。また、これら1万5千冊以外に大量のパンフレット・抜き刷りがあり、この中には一部ながらアロイス・マイヤーのものも見受けられるが、文庫の内容を補完するものとなっている。

「マイヤー文庫」はこれまでゲオルグ・フォン・マイヤーの蒐集に関わるものとみなされてきたが、内容を吟味・検討してみると、その比率は極めて小さいもののアロイス・マイヤー蔵書を含めた親子2代にわたるコレクションであったと、現時点では修正を加える必要があるかと思う。以上を紹介しておきたい。

1: 佐々木 力『ブリンキピア』の自然哲学』『思想』No.762.岩波書店 (1987年12月) [佐々木 力『近代学問理念の誕生』岩波書店 (1992年10月) に加筆再録]

2: 「ニュートン『ブリンキピア』初版 (1687)」『国立国会図書館月報』327号 国立国会図書館 (1988年6月)

(まつだ ひろし)

附属図書館百周年

次の百年

附属図書館情報サービス課資料運用掛長 田 中 耕 二

図書館百周年を迎えて、次の世紀への展望を試みるというのが当欄の趣旨であるが、次の百年に図書館自体がどうなっていくかなど、全く見当もつかない。

ことは図書館自体だけでなく、大学全体、ひいては学問というもののあり方そのものの変化によって、大きくかわってくる。

巷では、電子図書館がどうのとか、情報媒体や情報流通経路のことばかりに注目が集まっているようであるが、実は情報を生み出す学問、そして人間のあり方がどのように変わっていくかということが、一番根本にあるのだ。

次の世紀に、人間は社会はどのように変化してゆくか？ 一つ言えるのは、それは、あらゆる意味での「近代」を超克してゆく動きであるだろうということだ。（図書館というのもその「近代」から生まれたものなのであるが。）

「近代」の超克は、現在のあらゆる価値観の転倒をとともなうものだ。「近代」が確立した「資本主義」による効率性・生産性とそれを可能にする「競争」。（実は現在の学問のあり方、ひいては人間のあり方がこの「競争による効率性と生産性の向上」という原理に支配されているのだ）政治面では「民主主義」と「基本的人権」。近代はこれらの価値を確立し「進歩」の夢を謳ったのであるが、近代の超克に伴ってこれらの価値は総じてひっくりかえってしまうように思われる。

最も特徴的なのは、「近代」の根底に横たわる「進歩」という概念がもはやそれほど意味を持たなくなるだろうということである。実は学問、なかんずく「科学」はこの進歩の概念抜きには成り立ち得ない体のものであるから、科学そして学問の存在理由そのものが根源的に問われるようになるのは必然であろうと思われる。

近代における大学の図書館はこの「進歩」を存在理由とする学問に奉仕するために生まれ活

動してきたわけであるから、図書館の存在理由をも根源的に転回させられることになるだろう。「学問」が生産する「情報」の意味自体が根本的にかわってくるだろうし、それらの情報をもとめる人々が、何のために情報を得ようとするのかも、今からは考えられないような状況になるのではなかろうか。電子化を中心とする現在の情報環境は、1分1秒でも早くというのがその根本的な動因になっているが、これは競争原理ひいては「進歩」の概念がもたらすもので、これがひっくりかえると情報環境は全く様変わりしてしまうはずである。では、具体的にどのような状態になってしまうだろうか。

考えられるのは、人々はたぶん「目に見えるもの」より「目に見えないもの」により深く関心を示すようになるだろうということだ。この状況では、メディアというものは（図書などの伝統的な情報媒体も含めて）知識の量的増加のためにあるのではなくなくなる。人々は知識の量的増加にはあまり関心を示さない。人々は自己の奥深くへ分け入り、そこにすでにあるもの、すでにあったものを「発見」しようとする。すでにあるものでありながら隠されていたものを、自らの目の前に明らかにしようとしてとめる。そこでは知識の獲得ではなく根源的な知恵の発見が問題となる。

このような知恵の発見は、近代的学問のように、確立された客観的な方法論のもとで一步一步階段をのぼるように成果をつみかさねてゆくというようなやり方では、達成できない。知恵の発見のためには、確立された客観的な方法論など存在しない。自分自身の手で、自分の全人格的な行為として、つまり「魂」の運動として行われなければならない。そしてそれには、他の同行者との全人格的なつながりにより、あい助け合いながら行われていくことが不可欠であろう。

このような状況下では、「本」は、過去の人間との語り合いつまり真の意味での対話を可能にするもの、自己の魂の同行者となりうるもののみが意味を持つ。そして図書館も、過去の

人々との対話の場としてのみ意味をもつようになるだろう。その風景を、今から具体的に思い浮かべるのは、不可能であるが。

(たなか こうじ)

教官寄贈図書一覧(平成11年9月～11月)

身 分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	山田慶児	Medicine and the History of the Body	Ishiyaku Euro America, Inc	1999
名誉教授	近藤良夫	Human Motivation	3A corporation	1989
名誉教授	近藤良夫	Companywide Quality Control	3A corporation	1993
名誉教授	近藤良夫	統計的方法百問百答	日科技連	1982
名誉教授	近藤良夫	おはなしモチベーション	日本規格協会	1992
名誉教授	近藤良夫	野外工学のすすめQC百話	日本規格協会	1999
教授	上田皖亮	カオス・インパクト	森北出版	1999
名誉教授	米澤貞次郎	ノーベル賞の周辺	化学同人	1999
総長	長尾 真	食べる速さの生態学	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	ミクロ社会生態学	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾 真	インドネシアの地場産業	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	地域間研究 の試み 下	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	日本語音声の研究1 5	和泉出版	1994
教授	佐藤文彦	遺伝子組換え植物の光と影	学出出版センター	1999
教授	田中一義	The Science and Technology of Carbon nanotube	Elsevier	1999
教授	夫馬 進	増訂 使琉球録解題及び研究	榕樹書林	1999

..... 図書館の動き

京都大学図書館外部評価

京都大学には60を超える図書館・室があります。これらの図書館・室のあり方は、「調整された分散方式」と言われていますが、分散はしているが果たして調整されているといえるのか問題のあるところ。昨今、大学のあり方が問われ、京都大学の事務部門では事務の合理化、省力化のため事務改善検討委員会が設置されており、図書業務についても図書事務改善検討部会で改善の検討が続けられています。

附属図書館は、今年創立百周年を迎えたのを契機に、京都大学図書館全体のあり方を考えてみよう、部局の図書館・室と一緒に検討を行っています。まず7月下旬に、全学利用者アンケートを行いました。現在回答や意見を集約し、利用者の皆さんの要望に応える努力をしています。また、11月から全部局図書館・室が自己点検・評価で「現状と課題」を検討しました。さらに、外部の識者の点検評価を受けるべく外部評価委員会を設置し、第1回外部評価委員会を11月5日に行いました。第2回を平成12年1月に開催し、外部評価がとりまとめられる予定です。

3月には図書館利用者アンケート、「現状と課題」、そして外部評価を報告書としてまとめ、新しい世紀に向けて、京都大学の図書館の展望を探っていきたいと思っています。

日米DDS試行実験はじまる

日米の大学図書館間での文献複写サービスの可能性を検討するために、標記の試行実験を12月から開始しました。本実験は、文献複写の依頼及び資料の送付等文献複写業務における全ての過程がインターネットを利用して電子的に行われることが特徴です。文献複写の依頼や連絡は電子メールで行なわれ、資料はスキャナによりページイメージでコンピュータに取り込まれ、FTPあるいは電子メールの添付ファイルで依頼図書館に伝送されます。このようなサービスはDocument Delivery Service (DDS)と呼ばれ、複写文献の迅速な提供が可能となり、今後の図書館サービスの一つとして大きな期待が持たれています。アメリカでは既にRLG (Research Libraries Group)が開発したArielと呼ばれるシステムによりDDSが実運用されています。日本でもいくつかの大学でArielを利用したDDSが試行され、またミノルタ製の上向きスキャンを使ったシステム (EPICWIN)の開発も行われています。今回の実験では、両システムを使用することによる依頼・伝送に係わる技術的・手続き的な問題を解決すると共に、日米間でどの程度文献複写の利用があるかを把握することを目的としています。

実験には、日本側7機関（北海道大学、千葉大学、東京大学、東京工業大学、京都大学、慶応義塾大学、学術情報センター）とアメリカ側10機関（University of California-Berkeley, University of Chicago, Columbia University, Duke University, Harvard University, North Carolina State University, University of Oregon, University of Pittsburgh, University of Texas at Austin, University of Washington）が参加し、来年の3月まで行なわれます。

京都大学ではEPICWINを使用し、既にいくつかの大学との間でテスト文献の送受信に成功しています。お探しの資料で日本国内に所蔵が見つからない場合は、相互利用掛にご相談ください。

オンライン目録100万件突破！

10月22日、OPAC（オンライン目録検索システム）への登録件数が京都大学で100万件を突破しました。記念すべき100万件目のレコードは偶然にも、工学研究科地球系図書室所蔵の『京都大学百年史』でした。入力者である藤山優美さんには、菊池館長より記念の「盾」が贈られました。

100万件突破という偉業も、脈々と受け継がれてきた、全学の図書館・室の地道な努力の結果と言えます。しかしながら、京都大学の全蔵書数から見ると入力データは未だ6分の1にすぎず、今後も、600万冊近い蔵書の目録データベース化へむけて、より一層の努力でOPACの拡充につとめていきたいと職員は張り切っています。また、そのための経費の確保も望まれているところです。

総合人間学部図書館は、平日午後8時まで開館

総合人間学部図書館では、平成11年12月1日から平日の時間外開館を実施しています。閲覧、貸出、返却等、1階閲覧室は午後8時まで利用していただけます。「5限目の授業終了後もゆっくりと図書館へ来てください」と言えるようになりました。また、今年度の学長裁量経費で2階閲覧室の机と椅子の更新が認められ、春には新しい雰囲気になる予定です。（総合人間学部図書館 閲覧掛）

C O N T E N T S

京都大学附属図書館創立百周年記念式典に際して	1
式辞	4
祝辞	7
京都大学附属図書館創立百周年記念式典	10
新企画：地域・子供文庫も展示参加へ	11
附属図書館百周年	
『静脩』総目次を読む(3)	12
次の百年	15
教官寄贈図書一覧	16
図書館の動き	
京都大学図書館外部評価	17
日米DDS試行実験はじまる	17
オンライン目録100万件突破	18
総合人間学部図書館は、平日午後8時まで開館	18

編集後記

2000年あけましておめでとうございます。昨年は附属図書館創立百周年にあたり、外部評価、『静脩』臨時増刊号の発行、記念展示会、式典と目まぐるしい年でした。

『静脩』臨時増刊号は、時間と紙幅の制約から一部の方々の記事を掲載することしかできませんでした。今回から1年間、百周年関連記事を掲載することにしました。ぜひとも原稿をお寄せください。(G)